



## その声は

【佐賀県】齋藤 泰臣 さいとう やすおみ  
43歳

「病院まで遠いよ。最期の会話になるかもしれない」とそんなことない。間に合う」と小声で言い争う男女の声が、師走の電車で揺られていた私の耳に入ってきた。聞き耳を立てるつもりはなかったが、切羽詰まった男女のやり取りと内容が気になった。

夫婦夫婦と思しき2人は、携帯電話のぞき込み会話を続けていた。「電話したほうが良いよ」「いや、人の迷惑になる。駅に着いてからでいい」。他の乗客も気になるのか、2人に視線を向けていた。「意識なくても耳は聞こえるって。掛けないよ。お義父さん、待っているよ」「電車内だから掛けられないよ」。お互いに感情が高ぶり、少しずつ声が大きくなっていった。

携帯電話の向こう側で、息を引き取ろうとしている父親がいて、臨終の場に間に合わない状況にあるということは、その場の誰しもが理解できた。

緩和ケア病棟に勤務する私にとっては、静観できない場面であつた。病棟では家族から患者への最期の声掛けを、後悔がないように気持ち伝えることを促してきた。躊躇ためらいながらも席を立ち、2人に近付こうかとした時、「電話、掛けたほうがいいですよ」と2人の正面に座っていた女性が声を掛けた。近くにいた乗客も見守りながら頷うなづいている。背中を押されたように男性が電話を掛ける。「お袋、親父の耳元に携帯電話を置いてくれ」。電車内に声が

響く。「親父、親父が一生懸命働いてくれたから、俺たちは腹一杯に飯が食えて、少しもひもじい思いしなかつたよ。心配しないでいいから。本当に、本当にありがとう」。静まり返る電車内で嗚咽おぼえを懸命に抑える男性。苦情を言う者などいもしなかつた。

2人は何度も乗客に頭を下げながら、目的の駅で降りていった。電車内に師走の喧騒と冷気が入り込む。しかし、言葉にはできない胸の温かさを私は感じていた。あの場にいた誰もが、まさに「看護」をしていた。そして誰もが胸の温かさと同様に感じていただろう、「その声は届いている」と。